

発行:ラオスの子供に絵本を送る会 〒143東京都大田区南馬込6-29-12ミキハウス303 TEL/FAX03(3755)1603

ラオスの子供に絵本を送る会通信

第5号(1995年4月発行)



村での昼食に招かれた視察団。

視察旅行同行記

野口 朝夫

(財)国際ボランティア貯金普及協会

東南アジア視察団 ラオスコースという長い名前の団体に同行した。この協会は郵政省の国際ボランティア貯金を広く普及するための団体で、毎年、国際ボランティア貯金がどのように使われているかを視るため、視察団を組織しているとのこと。今年は、インドネシアとラオスがコース。ラオスには、全国の国際ボランティア貯金普及協会の役員(婦人会代表、マスメディア関係者、郵政省OB)など15名が参加。NGOメジャー団体である日本国際ボランティアセンターとマイナーである本会

との組み合わせで視察を行う。

本会のプロジェクト視察日は2月10日、ラオス到着の翌日である。

ヴィエンチャンで一番といわれるベルベデーレホテル、朝8:00、ポーンホーン地区ナトン小学校へ向かう。

いつもの会の出張ではこのような贅沢なところには絶対泊まらない。

会の運営に協力をいただいている作家ドゥアンドゥアンさんも同行。車中、会の活動の詳細を解説。しかし日本出発前からのインフルエンザで発熱40度という状態で頭が働かない。通訳のラオス在住のラオス研究者、増原さんの解説によると、ラオスで

活字文化が育たなかった理由は、韻を踏んだ口承による伝達が大切にされてきたことと、フランス植民地時代、ラオス語教育、使用に対し消極的な姿勢がとられてきたことが大きいという。

* *

ポーンホーン地区はヴィエンチャンより車で1時間ほどの平坦な農村部にある。高床式住居が50戸ほどが並ぶ。生活程度は低くない。ナトン小学校は6教室、児童数約180名。トタン屋根に竹網代の壁。平均的なラオスの小学校。電気は無い。暑さを避けるためか、ラオスの学校は何処

も窓が小さく、薄暗い。

赤いスカーフを結んだ子どもたちの踊りや詩の暗唱などでの歓迎式典。そして移動図書館の見学。納められた図書はだいぶ使用された跡がある。新しい本の補充を行う。会ではこれまで420箱の移動図書館を作成、各地に配布している。

メンバーはラオスの田舎に、のどかさや貧しさを感じた様子。

昼食は国立図書館員の実家二階広間で。糸で人々を結ぶ歓迎の伝統儀式パーシーを長老が行ってくれる。床いっぱいに広げられた料理は皆の口に良く合い、供された地酒（どぶろく）とともに気分もなごむ。演奏される民謡にあわせ踊り出すメンバーも。ゆったりとした昼下がり、ラオスの人のおおらかさと人なつこさに触れる。村の酒づくりや機織りを見学し、ヴィエンチャンに戻る。

* *

国立図書館見学。児童室、閲覧室、バイラン保存室などを見て回る。26.5万冊の蔵書、フランス語文献が中心。最近タイ語、英語の書物が多く入ってきているという。

12畳程の大人用閲覧室では数人の人が本を読んでいる。白いペンキの壁、青い蛍光灯の光、窓のない作り故か少し息苦しい。児童室では子どもたちが床の上で本を読んでいる。日本語、タイ語の絵本にラオス語文を貼付して使っている。これらの図書は、本会とSVAの支援による。量は決して充分とはいえない。

バイラン文献がなかなかの見物。椰子の葉の束に古代ラオス語で教典、伝記などが記されている。500年近くたったものもあり、ラオスの伝統文化を伝えるものとして近年熱心に

全国で収集作業が行われている。いずれ現代語訳の上、出版せねばとの思いを持つ。

* *

子ども文化センターの見学。ここはラオスで初めての情操教育の場として、昨年6月の正式オープンしたばかりの新しい施設。といっても建物はそれまで私立学校として使われていたもので、予算の都合もあり、ペンキ塗りなどの全面的な手入れができないまま、少々くたびれている感否めない。会はこのセンターの運営を全面的に支援している。

場所は、外務省、大蔵省などが並ぶヴィエンチャンの官庁街を入ったところ。年齢別の読書室、幼児お絵描き教室、編み物教室、絵画教室、民族音楽教室、演劇教室などに分かれている。子どもたちの数が多く熱気がある。いささか動員ではないかとの思いから、翌日午後再び訪れてみたが、やはりたくさん子どもたちが集まっていた。東京での予想以上にセンターの活動は活発だ。

土曜には朝から弁当を持参で、一日中いて次々と教室を移動している子どももいるとの話にビックリ。

各室の見学の後、伝統舞踊の練習風景を見る。上手い下手はともかく、子どもたちの瞳が燃えているのが感じられ、視察メンバーも熱心に写真をとる。

最後に国立図書館長コンドウアンさん、子ども文化センター館長ダラーさんからラオスの子どもの状況に関する説明を受ける。

「子どもたちは活字に親しんでこなかった。しかし本が嫌いなのではない。読むべき本がないのだ。セミナー等での読み聞かせにとっても良く反

応する。学齢期の時代に本に親しめば、もっと本を読むだろう。移動図書館はそのような考えの中から1990年にユニセフとの協力で生まれた。図書館を大切にすぎ、使われないことがあったり、配布に経費が掛かりすぎるなどの問題もある。しかし今までは本がどんなものかも知らなかった子どもたちが、興味を持ってみるようになってきた。これが成果である」(コンドウアンさん)

「子どもたちに本を読んでもらう場所がこれまでなかった。本がある環境造りをしたかった。また、絵を描くことなどの情操教育、古典音楽、芸能などの普及を通し、西欧文化に対しラオス文化を守るための場を作りたいかった。子ども文化センターの目的はそこにある。

去年は500名が登録した。今後はいかに経営の自立をはかるか、指導者を養成するか、首都のヴィエンチャンだけではなく、地方にどう広げて行くかが課題である」(ダラーさん)

子ども文化センターは、会としては新しい分野での支援でどのようになるのか、非常に気に掛かっていたが、ラオス側の運営能力が高く、想像以上に意味ある働きとなり、嬉しい限りだ。会のような小さな団体では、現地のパートナーの力量がプロジェクトの成否を握ることになる。

* *

ラオスレストランにて夕食会。メンバーの他、情報文化省副大臣、和田大使ご夫妻も参加。繊細なラオス料理を味わう。

なかなか知ることの無いラオスに触れ、ラオスファンが一人でも増えてくれればありがたいとの思いで、視察旅行同行を終えた。

ラオス人作家、ドゥアンドゥアンさん、ウティンさん講演会

「ラオスが今、求めているもの」

編集部

95年1月13日、東京・文京シビックセンターで、会主催でラオス人作家のドゥアンドゥアンさん、ウティンさん夫妻の講演会を行いました。40人近くの参加者で、活発に質疑応答がなされました。

■本を通して、深く考えられる子に

ウティン ラオスには子どもの本というのは、1975年の革命以前は5種類程度しかありませんでした。それ以後、私は子どもの本の出版担当となり、81年にやっと1冊できました。それは私の作品です。89年から90年にかけて、ユニセフの資金で5冊出版しました。

90年には日本人の田島伸二さんの作品のビックリ星を英語からラオス語に翻訳しました(註:この作品はラオスの子供に絵本を送る会が、ラオス国内に2万部無料配布)。小学生向

profile

ウティン・ブンヤヴォンさん: 1968年より作家活動を始める。75年より92年までラオス情報文化省に勤務。81年から85年までソ連に滞在し、ロシア語の本をラオス語に翻訳する仕事に携わる。

ドゥアンドゥアン・ブンヤヴォンさん: ラオスの教員養成学校を卒業後、フランスに留学し科学を学ぶ。75年より教員養成学校で教鞭をとるかたわら作家活動を行う。また、ラオスの女性の自立のための研究、農村の調査も手がける。



けにしたかったのですが、ラオスの教育からいうと実際にはもっと上の子向きでした。

ラオスには絵本ということばそのものが、まだありません。絵本づくりはラオスではじまったばかりで、まだ子どもの心理に合ったものにはなっていないということです。

ソ連の出版援助は80年から90年まで行われました。カラーできれいな本でしたが、内容はソ連の作家の作品で、私たちが翻訳したものでした。

外国の話ですから主人公や土地の名前がなじみがなく、子どもたちもあまり興味が持てないようでした。

90年以降現在までで100冊そろったかどうかくらいです。これらはユニセフや外国のNGOからの援助でラオス人作家が書いたものです。できあがった本は、国立図書館に納められ、移動図書館に入れて全国の小学校に無料配布されています。

ラオスではまだ、本を売するという段階ではありません。子どもたちは本を読む習慣が身についていません。私たちは、子どもたちが本からいろ

いろなことを吸収し、想像力を豊かにし、深く考えることのできる子に育てて欲しいと願っています。

これまでにつくった本は、1種類につき3,000部程度で、とても十分とはいえません。とはいえたくさんつくったとしても輸送するのに時間もコストもかかってしまいます。ビックリ星の場合、2万冊を配るのに、いろいろなNGOにお世話になって結局2〜3年かかりました。

■子の教育のために女性向けの本を

ドゥアンドゥアン ラオスの人口構成は、学齢の子どもがとても多いのに、学校に行っていない子がたくさんいます。ところが非識字者を減らす運動は、85年以降やや下火になっています。

ラオスの人口400万人のうち70%は農村にいて、その半数近くは山岳地帯です。町の子と田舎の子では就学率に大きな格差があります。とくに少数民族の子は教育が不十分であることが大きな問題となっています。彼らの言葉で書かれた教科書もあり

ません。政府もそれをつくろうとしているようですが実現しません。

またラオスでは男の子より女の子のほうが教育を受ける機会が少ないといえます。文字に接する機会が少なく、文字を忘れてしまう現状があります。母親が教育を受けないと子の教育に関心が薄く、だから女性向けの本が必要だと思います。

■ラオス人の潜在的な能力を伸ばす

ラオスには現在、外国のNGOが40団体あります。その中で本をつくる団体は非常に少ないです。本は自分を守ることができます。ラオスは経済的に強い国にはさまれていますから、人を育て、周りの国とバランスがとれるようにならなくてはなりません。ラオスはベトナムからタイへ、あるいは中国からカンボジアへぬける通り道になっています。それはいい面も悪い面あります。私がいちばん気にかけているのは、子どもたちが何が良くて悪いのかを考えられるバランスのとれた子に育つにはどうしたらいいかということです。今、ラオスが抱える大きな問題に森林伐採と廃棄物があります。工業国でないのに工場から出たようなゴミが増えているなど、外国のゴミ捨て場になろうとしています。また、放し飼いでいる家畜がビニールのゴミを食べて窒息し、一家の経済を支える貴重な家畜を失ってしまうという問題も多くなっています。これからラオスはどうすべきか、友人などと話していて考えているのは、近代的な工業国をめざすのではなく、ラオス人が潜在的に持っている能力を伸ばしていくことだということです。ですから援助ということでは

ば伝統的な織物、竹細工、陶芸などの工芸の応援をしていただければと思います。これまでの長い戦乱でそのような技術はずいぶん絶えてしまいました。例えば、本づくりを通してこれらのことを呼び掛け、伝えていくこともできると思います。はたしてどこまでできるかはわかりませんが、それでも、機織りの技術を通して女性たちが自立することができるようになっていきます。

■自分の言葉、文化をよく知ること

質問 タイとラオスをつなぐ橋が開通しました。タイのテレビやタイ語の本も入ってきているようですが、どう感じていますか。

ウティン タイの本はマンガが多いです。それも日本のマンガの翻訳です。タイのテレビは24時間受信できます。これは心配です。どうやって子どもたちにラオスの文化を身につけさせるかが課題です。ですから本は、新作、昔話、それぞれたくさんつくりたいと思います。

ドゥアンドゥアン タイとラオスは似ています。ちがいは文字と言葉です。私もタイ語の本で育ちました。しかしタイ語は話せません。昔からタイ語は入ってきましたが、今は圧倒的に多いです。自分の文化をしっかり持っていれば、外から何が入ってきても大丈夫です。しかし今は私は危機感を感じています。自分の言葉をよく知らなければならないと思います。

質問 ラオ語と少数民族の言葉についてはどうですか。

ウティン 少数民族の言葉には文字はありません。例えばモン族の言葉はローマ字で表記する方法がありま

す。しかし現在のところ政府はこれを認めていません。小学校はラオで行われています。服装はそれぞれの民族のものが認められています。少数民族の人は、高等教育を受けると、西欧化していくケースが多いですね。

ドゥアンドゥアン 少数民族の養成学校もあります。私は、少数民族の民話をラオ語で本にしています。また、辞書もつくっています。

会場から 少数民族の子は1年生だけでやめてしまうことがあります。言葉の問題で、あいうえおの授業も落ちこぼれてしまうからです。

質問 インドシナ開発など、開発についてどうお考えですか。

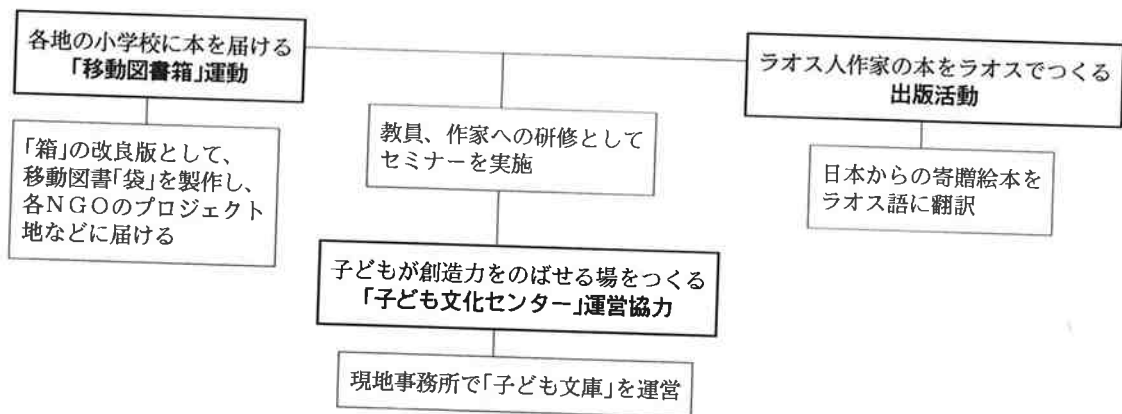
ドゥアンドゥアン 専門家は、道をダムをつくれと言います。しかし物流、電力など、ラオス人自身のニーズというよりは、むしろ外から要求といえます。たしかに道路は要です。しかし地域の人々の活動圏はそんなに広いわけではなく、きな道路をつくっても、地元の人そんなに通りません。村人と開発はギャップがあります。例えば電といっても、人々は使い方をよく知っているわけでもないし。タイ森林伐採のニュースはテレビなどみんなも見ているし、木を切れば水力がなくなることわかっています。しかし外貨を稼がなくてはならない。つまり「おなかが空いてい」と何も聞こえない」というわけで

ウティン ラオス(ラオス人民民主共和国)は英語でL A O P. D. Rと書きます。だれかがP. D. R.はPlease don't run.「ラオスよそんなに開発を急がないで」だと言いました。みなさんにもご紹介します。

ラオスの子供に絵本を送る会

1994年 活動報告

[活 動 概 要]



ラオスの子どもたちに本を読む楽しさを、 豊かな感性を伸ばせる場を。

本というものがほとんどないラオスの子どもたちに本を読む楽しさを知ってもらいたい。ラオス出身のチャントン・インタヴォンのそんな思いから、1982年にささやかに生まれたのが「ラオスの子供に絵本を送る会」です。

* *

94年は、これまでにまして多彩な活動が展開された年となりました。これまでの＜絵本一冊運動＞における、子ども用図書をはじめとする出版、移動図書館の製作配布のほかに、まったく新しいプロジェクトとして＜子ども文化センター＞の運営協力が始まり、すでに大きな成果を上げています。

また、現地への日本人スタッフの派遣によって、会の運営の改善すべき点も明らかになりました。派遣任期は終了しましたが、現地事務所の運営はラオス人スタッフが引き継いで行っています。

—— ラ オ ス と は ——

日本の本州ほどの国土に約400万人が住む。5割を占めるラオ族のほか70近くの民族からなる多民族国家。1975年のベトナム戦争終結とともに王国から社会主義国に。米軍の猛烈な空爆と内戦は国力を疲弊させ、教育の場にも深刻な影響を与えてきた。最大の支援国ソ連の崩壊で援助は途絶え、現在は開放政策をとる。主な産業は林業、米作、コーヒー、水力発電など。経済・文化面で隣国タイとの結びつきが強い。



子どもたちに本を届ける

「移動図書館」運動

「移動図書館」とは、70×80×25cmほどの木製の箱で、開けば書棚になる。これに子ども向け・一般向け・教員向けの書籍を詰め、全国の小学校に配布し、図書館として機能させていく。

ラオスの小学校は、とくに地方においては教科書さえも満足に揃わないという状況があり、ラオス政府は、これを国家プロジェクトとし、「2000年までにすべての小学校に移動図書館を」というスローガンを立てている。

配布された小学校では、授業中に副読本として使用したり、放課後に閲覧、貸出しを行っている。

会は、「移動図書館」運動を進めるラオス国立図書館と教育省を支援し、これまで過去3年間にわたって420箱の「移動図書館」の製作・配布を手がけてきた。

【1994年の活動】

94年は、93年度製作分の120箱と94年製作分の100箱の合計220箱を配布した。

配布は、2月にサヤブリ県、3月にカムアン県ターク、6月にルアンプラバーン県で行い、あわせて図書館の使用方法、読書の楽しみなどを伝えるセミナーを開催した。そのほか在ラオスNGO団体に託し、そのプロジェクト地に配布を行ったり、ラオス国立図書館による自主配布、ラオス情報文化省パイラーン・プロジェクトによる配布などにより全箱の配布を終えた。

配布に当たっては、これまでの箱の使用状況の追跡調査の結果を踏まえ、子ども達に人気のある図書を複数冊づつ入れた。本の種類は減少するものの、余り人気のない政治関係の図書を減らすことで全体としてのバランスを取った。また、本年製作した図書館100箱のうち、50箱は小学校用として教科書を入れ、のこり50箱には村落その他用として農業書などを入れ、配布先にふさわしい内容となるよう努めた。いかにせん、箱に詰める本が足りない。図書館運動を進めるには、自分たちで本づくりから取りかからなくてはならないという、負担の重い状況がある。さらに、これまで全国で配布してきた移動図書館について、本の補充が

必要となっている。7月にはサヤブリ県で読書推進のためのフォローアップを行った。

また、ボリカムサイの「子ども文化センター」において、6月に子どもたち約100人を集め、合宿形式の読書推進啓蒙のためのワークショップを行った。

「移動図書館」プロジェクトには歩兵85連隊戦友会、日本ユネスコ協会連盟、郵政省ボランティア貯金などからの資金援助を受けている。



移動図書館。全国各地の小学校に配布され、図書館として機能す

図書袋プロジェクト

「移動図書箱」について、1993年9月より1年間、現地に駐在員を派遣して追跡調査を行ったところ、次のような問題点が明らかになった。

●図書箱は重く、運搬に非常な労力と多額の経費を必要とするため、地方への配布の障害となっている。

●図書箱に担当者が鍵をかけて丁寧に保管してしまい、なかなか利用されないケースがある。また、せっかく大人用の本が入っていても、学校で管理することで、自由に利用できない状況もみられた。

これらの問題点を解決するために図書箱を改良した図書袋を考案、製作した。図書袋は、約60冊を収納でき、開けば壁掛け式の本棚となる。またリュック型で背負うことも可能なので、トラックの行きづらい地方山間部への運搬も可能となる。鍵をかけて保管されるということもなく、いつでもどこでもより多くの人々に利用されやすくなると思われる。

この「図書袋プロジェクト」は「移動図書箱運動」と同様に、主に小中学生向けの本を詰め、全国(特に地方)の小中学校に配布するほか、寺院など村落の拠点に設置し、よりはば広い人々の利用を計りたいと考えている。実際、村の人々から、農業の本、法律の本などを読みたいとの希望があがっている。

しかしながら、本年は「図書袋」での配布は、関係当局間の合意が形成されず、実施することができなかった。

【1995年の計画】

配布した「移動図書箱」が十分に活用されているか否かについては、配布先によってかなりのばらつきがあることが駐在員が行ったフォローアップの調査から明らかになった。教員の意識が高く、よく利用される学校では、本は綴じの部分に破けるほどに読まれ、糸やテープで修繕している。その一方で、箱に鍵をかけたままであったり、貸出しカードに記入されていない学校もある。

このようにせっかく届けたのに十分に活用されないケースもあるが、基本的には地方における識字啓蒙運動の手段として有効性が高いプロジェクトである。そこで本年も継続することを決定。新たに50箱の移動図書箱を製作する予定である。これまで同様、全国の小学校に配布し、識字と読書習慣の定着化を計りたい。

配布の際には、各県の教育委員会と連絡を取り、利用方法の指導、読み聞かせの実演などの「読書推進のためのセミナー」を実施し、子どものみならず大人、教育関係者の意識向上を計っていきたい。

また、これまで全国で配布してきた小学校に対しては、新たな本の補充が必要となっている。利用状況を調査しながら、要求に応じて補充配布を積極的に行い、子どもたちが継続的に読書への興味をもてるように計ってきたい。

図書袋プロジェクト

今年度は100袋の図書袋の製作を予定。会のカウンター・パートである国立図書館との相談のもとに配布先を決定する。これらに加えて、地方でプロジェクトを行っているさまざまなNGOと連絡を取り、スタッフの派遣の際に持参していくことを計画している。



図書袋。開けば壁にかけられ、
ためば背負うことができる。

ラオス語の本をつくる

出版活動

ラオスでは、本が絶対的に少ない。例えば、書店というのは、ヴィエンチャンでさえ3軒しか見かけることができない。教科書は雑貨屋でノートといっしょに売られているが、それ以外の雑誌、本は置かれていない。また私たちが訪問した印刷所では新聞を刷っているとのことだったが、それも5,000部のみだという。

とりわけ子ども向けの本は移動図書館に入れるものさえ満足に入手できないという状況がある。そこで会では、配る前にまず本をつくることに力を入れている。

現在、ヴィエンチャンで手に入る子ども向けの本は多く見積もっても70種類ほどといわれ、その内の30種類ほどが会でつくったものだ。

現地の作家、イラストレーターを起用しているが、作家という職業が成り立たない現状にあって、有能な人材はきわめて限られており、作品の質を上げるには育成に時間をかけなければならない。

印刷も現地の印刷所を使うことを基本としている。ただしカラー印刷は製版の工程はラオスではできず、タイで行っている。現在、紙代の値上がりが激しく、コストも上昇している。

できあがった本は、①図書館に詰めて新規配布先に届ける、②図書館の既配布先に新しい本として届ける、③子ども文化センター、国立図書館、会の子ども文庫などの蔵書とする、④NGOに託し、プロジェクト地の村に届ける、などとしている。以上のように、これまではすべて地方を中心に無償配布としてきた。今後はヴィエンチャンにおいては販売方式を導入し、売上げ金を次回の出版資金とすることも、現地カウンター・パートの国立図書館や情報文化省と協議している。

【1994年の活動】

本年度は子ども向け図書、絵本の出版に活動の重点を置くことにしたが、残念ながらさまざまな事情から、当初の計画通りの出版実績を上げることができなかった。

＜ラオス人作家による絵本、昔話の出版の実績＞

- | | |
|-------------------|--------|
| 1.『孤児と小さいお化け』合本再版 | 4,000部 |
| 2.『シンサイ 1巻』再版 | 500部 |
| 3.『シンサイ 2巻』再版 | 500部 |
| 4.『シンサイ 3巻』再版 | 1,500部 |
| 5.『シンサイ 4巻』再版 | 1,500部 |
| 6.『金色の猫』新刊 | 2,500部 |

『金色の猫』は豊前の国建国クラブよりの支援を受け、『シンサイ 3巻 4巻』は国際ボランティア貯金よりの支援をいただいた。

＜古典図書の編集出版＞

国立図書館の要請で、革命前に出版されていた本の再編集、出版を次のように行った。

- | | |
|-------------------|--------|
| 1.『マホーソット博士』 | 5,000部 |
| 2.『ヴィエンチャン流』詩の書き方 | 2,000部 |
| 3.『クン ブロム』歴史書 | 2,000部 |

ラオスの王様伝説。700年ほど前、バイラーン(貝葉文庫)に記録された、やや研究者向けの内容。

- | | |
|----------------------|--------|
| 4.『孤児キーフト』(編集集中) | 5,000部 |
| 5.『クンルーとナン オワ』(編集集中) | 3,500部 |
| 6.『ラオス語の歴史』(改訂作業中) | |

これらの事業には、国際ボランティア貯金よりの支援をいただいている。

＜絵とき辞書＞

昨年度から編集援助を行ってきたラオス初の子ども向け絵とき辞書は、編集作業が完了し、レイアウトの最終段階に入っている。

最終的には450ページほどのボリュームとなる見込み。挿し絵は経費の都合からモノクロとなった。95年6月までに初版3,000部の印刷を予定している。

この事業には、国際ボランティア貯金よりの支援をいただいている。

子ども向けコラム

本年度も、子どもたちに文字に興味を持つ機会を増やすとの観点から、月刊文芸誌「ニヤワソン」、女性同盟機関誌「ナムラオ」、子ども向け月刊誌「ワイデック」にコラムを一年間掲載するよう計画していた。

しかし、現地駐在員の意見もあり、コラム記載に熱心な「ワイデック」のみ一年間の支援を行い、他は9月で支援を完了した。

東京の体制の不十分さから、原稿を送り出すなどの積極的な対応ができなかったのが残念である。

翻訳絵本の作成

絵本は、現地で出版するほかに、日本の絵本を次のような方法で利用している。

日本で出版されている絵本から100点ほどを選んでリストを作成し、寄贈希望図書として寄付を募り、現地に送る。これらの本は、発行元の了解のもとに現地で日本人ボランティアなどの協力でラオス語に翻訳され、パソコンに入力されている。届いた絵本には翻訳文を貼り付け、子ども文化センターなどで利用している。

このほか、ラオスではまだ出版することのできない子ども向け図鑑、写真集なども人気があるので、リスト以外でも受け入れている。

【1995年の計画】

国立図書館は、手に入る同じ本を数冊ずつ図書館に詰めているが、子どもたちに本に対する興味を持たせるためには、子どもたちが興味をもって読める本を、もっと数多く提供していかなければならない。読書推進運動を成功させるためにも、これまで図書館を配布した先に、新規の本の補充を行っていききたい。

そこで、本年度も子ども用図書の出版事業に活動の重点を置きたい。また、配布の能力の問題から1点の出版物の部数を多くするより、種類を増やしていきたい。

出版内容は、昨年に引き続いて、子ども向け創作絵本、古典の再版のほかに、95年3月実施の絵本作家派遣セミナーで作成する文字・数字絵本を出版することなどを予定している。どのような本を出版していくかは、現地コーディネーターと協力し、幅広く選択していきたい。

翻訳絵本の作成

昨年作成した寄贈希望図書リストを積極的に利用し、広く呼び掛け、図書を受け入れていけるよう準備を進めたい。この運動は、東京のみならず全国で協力者を募り、自主的な運営により会の活動に協力していただくことができる可能性があると考えます。

ご協力いただける方は、会まで図書リストをご請求ください。



創造力を伸ばす場をつくる

子ども文化センター

現在のラオスの学校教育では、図画工作、音楽など情操面での教育が行われていない。そこで、その拠点をつくろうとの意気込みのもとに、情報文化省によって「子ども文化センター」が、本年6月にヴィエンチャンで、続いてヴィエンチャンの東側の隣のボリカムサイ県で開設された。

ヴィエンチャンでの開館式には、会からも代表、事務局長など3名が参加。現地では情報文化省副大臣、日本大使ご夫妻など多彩な方々のご参加のもとに行われた。

会は同センターの開設準備から運営など全般にわたって協力を行っている。

【1994年の活動】

ヴィエンチャンの子ども文化センターは官庁街のはずれにある、元は私立の学校であった建物の2階スペースを改修して用いられている。

当初、半分のスペースはオーストラリア政府の援助により西洋音楽教室として用いられる予定であったが、都合によりまだ開設されておらず、2階全スペースが、年齢に応じた読書室、工作教室、編み物教室、絵画教室、伝統舞踊教室、伝統音楽教室、演劇教室などのためのスペースとして用いられている。

センターは水曜日から日曜日まで開かれ、週日、日曜日は半日、土曜日は終日開館されている。

子どもたちには大好評で、一日の入館者数はおよそ100人を越えるとのこと。

最初は子どもたちの熱心さに、何事が始まったのかと訝しげであった親たちも、今では運営に協力したり、毎日閉館時に子どもたちを迎えにきたりと、すっかり馴染んでいる。土曜日には朝から弁当持ちで入館し、閉館時まであちこちの教室に順に顔を出す子どももいるとのこと。

熱心に子どもたちが本を読む姿や、指導者のもと楽しそうに工作をしているところ、ぎこちない仕草ながら懸命に伝統舞踊を学んでいる姿などをみると、子ども文化センターの開設の意義を感じる。

このような予想以上の評判ではあるが、図書、教材、スタ

ッフなど施設面は貧弱で不十分であり、より多くの子どもたちが充分に利用できるように、より一層の充実が求められている。

子ども文化センターは、ヴィエンチャン、ボリカムサイのほかの地方においても設置したいという希望が寄せられており、より多くの子どもたちが情操教育を受けられる場を作るよう検討する必要がある。



ヴィエンチャン「子ども文化センター」

【1995年の計画】

子ども文化センターに対し、本年は昨年にも増して運営を充実させるために、積極的に協力していきたい。

また、ヴィエンチャンでの成功に刺激され、小さいながら自主的に積極的な活動を行ってきたボリカムサイの子ども文化センターのみならず、ヴィエンチャンの西側の隣のサヤブリ県でも、センター開設の意欲を見せ、会に対して運営支援要請を寄せてきている。

子ども文化センターの運動を広げ、各地の子どもたちが、情操教育を受けられるようになるためにも、今後これらヴィエンチャン以外のセンターの活動支援も行いたいと考えている。

95年3月に予定されている、日本からの絵本作家若山憲さん、紙芝居、造形作家やべみつのりさんを派遣しての絵本作成セミナー、工作指導セミナーなどの企画は現地においてもたいへん期待されている。

また、4月からは、93年にラオス全国を公演し大好評を博した「みつめ遊戯団」のパントマイマー、あさぬまちずこさんが、約3か月にわたって子ども文化センターで身体表現のワークショップを行う。

これら子ども文化センターを足場とする新しい形の活動として、来年にかけてさらに積極的に企画を実行していきたい。

現地に長期あるいは短期滞在し、子ども文化センターを拠点に子ども向けの音楽、保育、演劇、芸術などの活動をすることに興味のある方、ご連絡をください。いっしょに企画を考え、つくり出していきましょう。

現地事務所内「子ども文庫」

会のヴィエンチャン事務所の一室を「子ども文庫」としている。ここには、会で出版した本、日本から寄せられた図鑑類、翻訳絵本などを置いている。図書カードをつくり、貸出しも行っている。狭いながら、1日に約60人ほどの子どもが訪れている。

ただ、現状では事務所の片隅での活動といった規模なので、今後は、本を整備、補充し、担当者(現状ではアルバイト)の補強などによって、より地域に根ざした「文庫」として充実させていきたい。



会のヴィエンチャン事務所内につくられた「子ども文庫」

国内活動

【1994年の活動】

——ニュースレターの発行——

昨年から会のニュースレターとして、「ラオスの子供に絵本を送る会通信」の発行を開始した。年4回の発刊を予定していたが、体制の不十分さから2号、3号、4号の三回しか発刊できなかった。部数は徐々に増え、4号で1,500部となった。

「通信」は、これまで余り十分とはいえなかった活動報告と広報の目的のために発刊している。皆さんからの反響からその目的は達せられているように評価できる。とくに4号に同封したアンケートに、多くの方から返答をいただき、事務局としては皆さんが、より近い存在として感じることができ、成果と考えている。

記事の内容としては、会の活動の仕組み、試行錯誤を分かりやすく皆さんに伝わるような工夫を重ねていきたい。

——ラオス正月「サバイディ・ピーマイ」パーティ——

今年も4月の第3日曜日、会の大きなイベントである正月パーティを約120名の参加を得て東京蒲田で開催した。

昨年に続きの東京ガス大田支社の全面的なご協力をいただき、さらにジャズ・サクソ奏者である坂田明さんが、素晴らしい演奏をしてくださるなど、なかなかの盛り上がりがあった。

一般には馴染みの薄いラオスの料理を味わっていただきながら、会の活動をビデオなどで紹介していった。

事前の準備にも多くの方々のご協力を得、感謝にたえない。

■文房具など物資の送付は原則として行わない。

これまで会では文房具など、物資の送付を行ってきた。しかし現在では、会で指定した書籍以外は、原則として行わないことにしている。

輸送費が非常に掛かること、相手のニーズに必ずしも合致しないことがあること、相手の生活秩序を破壊することがあること、「もの」を送ることの意味、送り手の意識に議論の余地があることなどから原則的には受け入れないこととしてきた。

【1995年の計画】

広報活動として、ニュースレター「ラオスの子供に絵本を送る会通信」の年4回発行をめざすとともに、会の紹介のパンフレットを新たにつくこと、活動紹介用の各種パネル、ビデオの整備などをさらに進めたい。

また、プロジェクトごとのメディアに対するキャンペーンなど、講演会、報告会とからめて積極的に企画し、活動を広く理解してもらうよう働きかけたい。

■手軽に、協力できるしくみづくりを。

東京事務所への連絡のうち、物資寄付についての問い合わせが非常に多い。これは昨今多く出版されている「だれでもできるボランティア」といった本、記事の反映だと思うが、一般には物資寄付がいちばん手軽な協力のイメージであることに違いない。そのことを考えると、例えば、換金の可能な古切手、テレホンカードの募集など誰にでも参加できる方法の開拓が必要に思われる。しかし当面は、事務局の人手不足のため、それらに着手することはできそうにない。

そこで、翻訳絵本づくりのリストをPRし、それらの中古絵本を募ることなどで、手軽に参加できるボランティアのしくみづくりをしていきたい。



東京蒲田で行われた、ラオス正月パーティ

事務所の体制

【1994年の活動】

■東京事務所

ラオス現地での活動を充実させるためには、日本国内での事務局の活動がスムーズでなければならないことが、ますます認識されてきた。それには、事務局を支える人材の確保であり、財源の安定化が急務となっている。

事務量の増加に伴い、今年から定例会は、これまでの月1回から2回へと増やした。それでも協議、決定しなければいけない事項が多く時間切れが頻繁に生じている。また、毎回のごとく新しい方が、「見学」?にいらっしゃるが、何故か、なかなか継続した活動につながっていかないことが多く、慢性的な人材不足に陥ったままである。とりわけ会計担当者などは、近年会の活動の活発化と事務処理の厳正化から、非常に仕事量が増加し、一部の者に過度に負担が掛かる深刻な問題を生じている。本年はその影響もあり、会計担当者の交代があった。

財政について。各種団体から援助をいただいている寄付金はそのほとんどが、プロジェクト寄付として使用目的が特定されている。その時々々の必要性に応じて柔軟に用途を変えろということとは難しく、一般に人件費、事務所運営費等への配分はなかなか認められないため、プロジェクト寄付とは別の財源の確保が緊要となっている。

しかし残念ながら、そのための実際の活動にはとりたてて妙案があるわけではなく、皆さんの会の活動へのご理解を得て、より幅広いご支援をいただく以外にはない。

かねてから懸案であった有給スタッフの雇用については、まず最初のステップとして、9月より、事務処理をすすめるためのアルバイトの雇用を行うことができた。この雇用により、寄付者にたいする領収書の発行や問い合わせに対する、迅速な応対が可能となった。

現地においてコーディネーターを勤めていただいていた作家のドゥアンドゥアンさんが国際交流基金の招請により7月より半年間、東京に滞在なさった。そこで、会の定例会にも頻繁に出席いただき、様々のアドバイスを受けることができた。またドゥアンドゥアンさんが編集をすすめている「絵とき辞書」のキャンペーンを行うことができた。

■現地事務所

93年夏より一年間、会の初めての現地駐在員として木口由香をヴィエンチャンに派遣した。駐在の派遣により、これまでの諸活動を評価し、移動図書館など事業を展開するにあって多くの情報を得ることができた。とりわけ実際の現場に長期間立ち会うことにより、東京では把握できない各種の問題点を指摘できたことには意義がある。

しかしその一方、東京は専従スタッフがおらず、現地への支援体制が不十分となり、駐在にたいする反応の遅さからコミュニケーション・ギャップを生じてしまった。東京と現地での判断の違い、意見の違いなどがあり、しばしば困難な局面に直面することとなった。これらの局面で会組織としての多くの問題が明らかになり、各種活動にも大きな影響を与えることとなった。

この一年の経験により、駐在スタッフの存在価値について学ぶとともに、会として現地をしっかりと支援できる体制を確立することが派遣の前提条件であることを学んだ。

また人選についても、その教育を含め、より慎重な審査が必要とされることが明確になった。

【1995年の計画】

現在の会の体制は、ヴィエンチャン事務所にラオス人スタッフ1人が常勤し、出版事業の調整、子ども文化センターの運営の協力にあたっている。さらに事務所内子ども文庫の担当者としてアルバイトが1人おり、計2人のスタッフがいる。対する東京事務所には今なお専従スタッフはいない。より迅速で責任ある事業運営を考えれば専従スタッフの雇用は必要不可欠である。今年度からこの2年ほどボランティアとして会の運営を支えてきてくれた、赤井朱子を有給専従スタッフとして雇用することを決定した。財政的な理由から週2～3回の勤務としたが、この雇用により会の運営がこれまでと違った積極性と発展を持つようになるものと期待している。

また、より多くの方々が会の活動に積極的に参加していただけるような会の運営方法を考えていきたい。

1994年度会計報告

(1994年1月1日～12月31日)

■前期より繰越(a) 5,407,490円

■収入の部

●一般寄付金(延べ409件).....	2,305,797円
●プロジェクトへの寄付.....	4,783,811円
郵政省国際ボランティア貯金	2,675,000円
日本ユネスコ協会連盟	1,251,000円
豊前の国ほか	857,811円
●その他の収入.....	781,720円
書籍、絵はがきセットなど売上げ	141,963円
ラオス正月パーティ参加費	477,300円
受取利息	25,563円
雑収入(為替差益:105,944円含む)	136,894円

合 計(b) 7,871,328円

■支出の部

①プロジェクト経費(c) 5,662,481円

◆絵本一冊運動.....3,176,776円

●移動図書館プロジェクト 1,390,064円

 移動図書館製作費 667,586円

 移動図書館配布・セミナー費 722,478円

●絵本出版 678,947円

●絵解き辞書編集費 308,000円

●古典再版 735,277円

●子ども向けコラム掲載 53,015円

●各地への図書館の配布費 7,697円

●事務所内の文庫経費(図書カード) 3,776円

◆子ども文化センター.....1,036,984円

 開設費 514,342円

 書籍補充費(翻訳・タイプ・コピー代含む)

177,853円

 教材費 29,575円

 備品費 40,486円

 交通費 1,690円

 指導員人件費 256,500円

 雑費 3,567円

 セミナー費 12,941円

人件費(木口由香:1月～7月分、コーディ

ネーター:1月～12月分).....1,047,441円

出張費.....401,310円

②東京事務所経費(d) 1,344,207円

通信費 161,942円

事務費 137,748円

印刷費 37,174円

運搬費 32,110円

ニュースレター制作費 362,466円

家賃 200,000円

交際費 22,565円

交通費 6,160円

アルバイト人件費 118,580円

ラオス正月パーティ経費 222,672円

雑費(送金手数料含む) 42,790円

③ラオス事務所経費(e) 598,139円

事務費 42,138円

通信費 105,290円

水道光熱費 2,313円

備品費(バイク、電話器、設置費) 194,648円

出張費(木口駐在員帰国費含む) 111,833円

交通費(市内交通費) 10,323円

アルバイト人件費 27,319円

家賃 63,600円

雑費(送金手数料含む) 40,766円

支出合計(f)=(c)+(d)+(e) 7,604,827円

次期へ繰越 (a)+(b)-(f) 5,673,991円

(プロジェクト費未払い分を含む)

< 事務局体制 >

代 表: チャンタソン インタヴォン

顧 問: 小沢有作, 越田 稜, 関 ちか

事務局長: 森 透

書 記: 赤井朱子

会 計: 風間美苗

総 務: 野口朝夫

1994年

国内活動

ラオスの子供に絵本を送る会は、現地でのプロジェクトだけでなく、私たちの活動を広く知っていただくために、日本国内でもさまざまな活動を行っています。

◆ 3月19, 20日
国際NGOフェスティバル
(神田YMCA)

◆ 4月17日
ラオスお正月パーティ
「サバイディ・ピーマイ」
(東京ガス 大田支社)

◆ 5月29日
東京グリーンウォーク '94
(世田谷公園)

◆ 9月27日
駐在員婦国報告会
(中央労政会館)

◆ 10月1, 2日
国際協力フェスティバル
(日比谷公園)

◆ 10月
活動紹介パネル展示
(大森郵便局)

◆ 11月11日
大田区国際ボランティア貯金
推進協力会総会

◆ 12月4～18日
タイ、ラオス、カンボジア
合同展
(町田ぶらぼう館)



国際協力フェスティバル



タイ、ラオス、カンボジア 合同展

<パネルの貸出し>

- 日大桜ヶ丘高校
- 大和市下福田中学校
- 世田谷区等々力小学校
- 北海道北見青年会議所 など



せまいながらも東京事務所

「使い古しの絵本があるのですが、利用して頂けますか？」と女性からの問い合わせ。

現在、会では本なら何でも受け付けるといふ訳ではなく、寄付希望図書リストの中からお願いしたい旨をお答する。このリストの本はラオス語の翻訳を現地にて準備しており、絵本に貼付して、子ども文化センターなどで利用してもらっているのだ。各種メディアの「誰でも参加できるボランティア」特集などに会が掲載されることが多く、このところ、このような物資寄付に関する問い合わせが頻繁にある。一件の問い合わせを終え、受話器を置くまもなく、またリンとベルが鳴る。忙しい日に限って、問い合わせの電話の回数が多いのは何故か？

このように東京事務所の日常業務の一つが、各種電話への対応である。出版社からの問い合わせ。小学校の子どもたちが、「お金を集めたのでどのように送ったら良いのか？」「文化祭に展示したいので、資料を貸して欲しい」。「ラオスのことを教えて欲しい」。「会の資料が欲しい」などなど。困ったことに、「まだ領収書が送られてこないぞ」というクレームもある(申し訳ありません)。先日なんと「ラオス大使館の紹介ですが、会に相談すればラオスのビザがすぐ取れるとのことですが」、という電話まであった(これはもちろん誤り。ラオスのビザはかなり取りにくく、我々も出発直前まで手に入らずヤキモキすることが多い)。

曲がりなりにも会の事務所が構えら

編集部



定例会にて、議論は尽きない。

れてから2年少々。以前に比べれば会の運営はずいぶんきちっとしてきた。それまでは書類を幾つも抱えての放浪生活。たいへんな進歩だ。

といっても現在の事務所も、会のメンバーの経営する設計事務所の机一つを借りての間借り生活ではある。第一日曜日の午後と第三水曜の夜の定例会には、毎回10名ほどの方が参加し、議論も深くなってきているし、コンピューターでの事務処理もすすみ、事務所としての雰囲気は一応できてきた。

しかしながら、東京事務所の運営に当たっての最大の問題は、常駐スタッフがいないことだ(ヴィエンチャン事務所にはラオス女性スタッフがあり、活躍している)。これはもっぱら財源の理由に依るのだが、ラオス現地で用いるお金を少しでも多くしたいとの意志もあり、東京には有給スタッフを置かないという体制で、これまで会は運営されてきた。

ということは、電話への対応などは家主たる設計事務所の所長の野口朝夫が、自分の席の隣に電話を置いて、仕事の傍ら、「もしもし、ラオスの子供に絵本を送る会です」を繰り返していたのである。

電話での問い合わせには、これで何

とかなるものの、このところ急速に増えている書類の作成、回答が必要な問い合わせへの対応がこなしきれなくなっている。また、会の活動分野が広がるにともない、ラオスとのやりとりも増加している。悪いことに(?)、昨年からのラオスとの電話回線が改善され、安く容易に使えるようになったことから、すぐに返事をしなくてはいけない用件も増えている。会計担当の風間美苗などは、仕事を終えた後、毎週のように事務所に顔を出し、経理の整理をしている。頭の下がる思いだ。

そのような状況から、2月の定例会で、本年度の最優先課題として東京事務所に有給スタッフを雇用する方針が決定された。雇用されるのは、これまで3年間ほど会の運営に携わってきた赤井朱子。

残念ながら当分は週2〜3回の勤務体制となるが、これまでより、日常業務の迅速な処理行われ、皆さんにご迷惑をおかけしないですむようになると期待している。

皆さんも、活動内容のお問い合わせ、ご意見など、これまでに増して気軽にお寄せいただき、会の運営の活性化に結び付けていきたいので、くれぐれもよろしくお願いしたい。